
舞台の袖に

佐智

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

舞台の袖に

【Nコード】

N7525T

【作者名】

佐智

【あらすじ】

異常な双子と元幼馴染。ひと月前に再会した幼馴染がようやく双子に受け入れられるようになった頃の話。幼馴染視点。

「なあ」

「何」

振り返りはしない。

それでも返事をくれるだけましになったと俺は思った。少し前までは、視界にさえ入れてもらえなかったのだ。

「お前らさ、お互いのどこが好きなの？」

「全部」

双子は俺には絶対向けられないような笑顔をして、即答した。

「ふーん。じゃあ、顔も？」

ほんとこんなくだらない質問にも答えしてくれるようになるなんて、一ヶ月前の俺は思いもなかっただろう。

「そつだよ」

「当たり前じゃん」

そう言った時、俺達は食堂についた。

話を中断して俺は席を探す。

しよせん双子にとつて俺は道具でしかない。それでもあいつらの近くにいれるなら。壊れる前に手を差し延べられるなら。

俺は一番の道具になることを選んだ。

だからこそ、今昼食と一緒に食べられるのだし、くだらない質問にも答えてくれる。

はたからみたら、友達に見えるかもしれない。俺はそれで十分なのだ。

席を見つけて昼食を買うと、俺はさっきの質問の続きをした。

「じゃあ、お前らは自分の顔を好きなわけ？」

「まあ、祐樹が好きな顔なら好きだよ」

「でもそつという意味の質問じゃないでしょ？」

くすくすとお互いを見て笑う双子に、俺は背筋に汗が伝うのを感じた。

この笑いだけはどうしても怖い。

「ああ……」

この双子はまったく顔が同じだ。見分けるための黒子がなければ、髪型もまったく同じ。俺からしてみれば、祐樹の顔が好きなら優季の顔も好きだろうし、その逆もまたしかり。

「お前らにはきちんと違く見えるわけ？」

「うっん」

「同じだよね」

今度は本当に嬉しそうに笑う双子。

「でもー」

「祐樹は怒ってるときが」

「優季は泣いてるときが」

「一番綺麗だよね」

無邪気に笑う双子に俺は何も言えなくなった。

……もう取り返しがつかないのかもしれない。

「あ、チャイムだ」

そう言ったのはおそらく優季。

「いいじゃん、別に遅れても」

むくれるのは祐樹。

「ダメ。僕は空気として過ごしたいの」

「僕といたくないの？」

「いたいけど、クラスで目立つ方が嫌。僕は祐樹以外と関わりたくない」

一瞬だけ俺を見た。

無感情な瞳が何を思っているかはわからなかった。

「そっか……」

あからさまに安堵の色を浮かべた祐樹に、優季はため息をついた。

「むしろ僕は皆と仲良くしてる祐樹に文句を言いたいよ」
祐樹は平気なんだね。

そう言っつて優季は先に行こうとした。

「待ってよ!」

優季は足を止めない。けれど、何となくわかってしまった。

絶対笑っつてやがる……。

双子がお互いを一番に思っつているのは、揺るぎない事実。それをわかっていての発言。

言っつてしまえば、茶番だ。それでも繰り返す双子は、やはりどこか不安を感じているのだろう。その不安が崩壊に繋がる。

「あんな奴ら、どうでもいいよ」

「道具、でしょ?」

「そう。使い捨てるの道具。もしかしたら優季の盾になってくれるかもよ」

全部優季のためだから。

どうでもいいけど、優季の役に立つかもしれないから。

そう言っつて優季の手を握る祐樹。

双子は肩を並べて歩きだした。

「ねえ、優季に何かあつたら好きに使っつていいよ」

「わかつた、覚えとくよ」

俺は教室につく前に、こっそりと双子から離れた。深入りしすぎると俺も使い捨てられるだろう。

あいにく、使い捨てられる気はまだない。

これから先も俺は双子に捕われ続けるだろうから。

甘くてどこか痺れる、それでいて力を入れてしまえばすぐに割れてしまう飴玉を、

もう少しだけ味わっつていたいのだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7525t/>

舞台の袖に

2011年6月8日03時41分発行